

古代日本人の價值觀

——『古事記』中卷・下卷の内容の價值現象學的考察——

高 階 順 治

本稿は、最近刊行の『日本精神の根本問題』中に掲載されてゐる「純日本精神の價值觀」の續篇たるの意味を有つものである。該稿の内容の大體の要點は『日本語學振興委員會研究報告』（特輯第一篇）中に録載されてゐる『古事記に於ける神話内容の價值學的考究』に敘べられてゐるが、それは『古事記』上卷神代之卷即ち古事記の神話内容に現はれてゐる價值的存在への價值現象學的解明の試みであつた。そこには、日本民族精神の搖籃たる神話の中に深き意味に於て象徴されてゐる「純日本精神の價值觀」があるがままの姿態に於て全體的に開明されてゐる筈である。随つてその續篇の意味を有つ本稿は、右の價值觀の必然的展開と解されるところの「古代日本人の價值觀」であり、そしてその内容は、『古事記』中卷・下卷に示されてゐるところの價值的存在の考究である。即ち國史上に現はれた最古代の日本人の價值觀であり、神話内容に盛られてゐる如き象徴的なるものの解釋ではない。それはより多く實證的性質を具へてゐる。併しなから、さればといつてそれは歴史學的立場の考究であるのではない。それはどこまでも神話内に象徴されたものの自らなる自己開展であり、それとの關聯を離れて意味を有つものではない。それ故に、その考究の仕方亦、價值現象學的立場、即ち哲學的立場のものである。即ち上掲の如き副題を添へた所以である。

「純日本精神の價值觀」の要點を一言するならば、そこに示された價值的存在の價值主觀は神々であり、價值客觀は全存在自體であり、價值作用は清明心の働きであるといふことである。これら三要素が價值的存在自體を構成してゐる。さてその價值主觀たる神々を高めて絶對化してゐる根基は天ツ神であられ、その天ツ神の現世的顯現は「あきつみかみ」で在らせられる。またその價值客觀たる全存在自體に先天的統一を與へてゐる唯一中心は「あまつひつぎ」であられ、價值作用たる清明心の最純粹の働きは「しろしめし」であられる。それ故に最高の價值的存在自體は、「あきつみかみ」として「あまつひつぎ」を踏し、常に「しろしめし」をなされるところの、「すめらみこと」であらせられることとなる。ここに神聖なる價值的存在自體が現實化せられ、他の價値のすべては、この神聖なる價值的存在自體に參與する限りに於てのみ、初めて自らの存在の意義を有つこととなる。ここに一君萬民の原理も存在するのである。以上の如き價值觀の自らなる自己開展たるの意味を有つものが、即ち本稿の内容である。

一 價值的存在自體

凡そ價值的存在自體は、それが眞的なるもの、善的なるもの、美的なるもの、聖的なるもの等の何れたることを問はず、最高の價值的存在即ち理想的なるものの自己表現であり、常に全存在的一體性として存在するものである。併しながら、學的究明の必要上假りにこれを分析的に考へて見るならば、そこに我々は價值主觀・價值客觀・價值作用の三構成要素の存在することを認めざるを得ない。随つて價值的存在自體の究明は、自らこれら三要素

の方面より各々なざるべきであり、それらの分析的究明を俟つて初めてその全存在的一體性も明かとなり、理想的なるもの一般の本質も全的に解明し得られるものと信するのである。

さて、古代日本人の世界観、即ち宇宙観と人生観、随つてまたその價値観をも最も純粹に結晶せしめてゐると思はれる『古事記』に於て、その上巻即ち神話の部分は今は暫く措き、歴史的部分として認められるその中巻・下巻の中に顯示または暗示されてゐる理想的なるもの、即ち最高の價値的存在自體は如何なるものであらうか。

『古事記』の中巻・下巻を心して讀む者は何人も先づ、その中に一貫してゐる價値的理念が、完美なる表現に於て明示せられてゐる事實を、直ちに感得し得るであらう。それは例へば、「神倭伊波禮毘古命(神武天皇)、^{うらび}白橋原ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき」といふ如きである。尤も、神武天皇の件りに於てはこのままの表現はなく、

「かれかくのごと、荒ぶる神等^{こゝろ}を言向けやはし、伏はぬ人どもを掃ひ平げたまひて、^{まつろ}敵火之白橋原ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき」

と叙べられてゐるが、中巻綏靖天皇の件りより、下巻の終り、即ち推古天皇の件りに至るまでの間すべて一尤もその間に御在位年數を附加してゐるところもあるが、右の如き完美なる表現に於て、全巻に共通の價値的理念が明示せられてゐるのである。即ち次の如くである。

「神治河耳ノ命(綏靖天皇)、^{かつらぎたかひのみこと}葛城ノ高岡ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」

- 「師木津日子玉手見ノ命(安寧天皇)、片鹽ノ浮穴ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「大倭日子鈕友ノ命(懿德天皇)、輕ノ境阿ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「御眞津日子訶惠志泥ノ命(孝昭天皇)、葛城ノ掖ノ上ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「大倭帶日子國押人ノ命(孝安天皇)、葛城ノ壁ノ秋津島ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「大倭根日子日子賦斗邇ノ命(孝靈天皇)、黒田ノ廬戸ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「大倭根日子日子國玖瑠ノ命(孝元天皇)、輕ノ境原ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「若倭根日子日子大毘毘ノ命(開化天皇)、春日ノ伊邪河ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「御眞木入日子印惠ノ命(崇神天皇)、師木ノ小垣ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「伊久米伊理毘古伊佐知ノ命(垂仁天皇)、師木ノ玉垣ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「大帶日子湊斯呂和氣ノ命(景行天皇)、纏向ノ日代ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「若磐日子ノ天皇(成務天皇)、近ツ淡海ノ志賀ノ高穴穗ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「帶中ツ日子ノ天皇(仲哀天皇)、穴門ノ豊浦ノ宮また筑紫ノ訶志比ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「品陀和氣ノ命(應神天皇)、輕島ノ明ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「大雀ノ命(仁德天皇)、難波ノ高津ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「伊邪本和氣ノ命(履中天皇)、伊波禮ノ若櫻ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「水齒別ノ命(反正天皇)、多治比ノ柴垣ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「男淺津間若子ノ宿禰ノ命(允恭天皇)、遠ツ飛鳥ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」
- 「穴穗ノ御子(安閑天皇)、石ノ上ノ穴穗ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき。」

古代日本人の價值觀

高松高等商業學校紀元二千六百年記念論文集

二七四

- 「大長谷ノ若建ノ命(雄略天皇)、長谷ノ朝倉ノ宮にしまして、天ノ下治しめしき。」
- 「白髮ノ大倭根子ノ命(清寧天皇)、伊波禮之麴栗ノ宮にしまして、天ノ下治しめしき。」
- 「衰祚之石葉別ノ命(顯宗天皇)、近ヶ飛鳥ノ宮にしまして、八歳天ノ下治しめしき。」
- 「意富祚ノ命(仁賢天皇)、石ノ上ノ廣高ノ宮にしまして、天ノ下治しめしき。」
- 「小長谷ノ若雀ノ命(武烈天皇)、長谷之列木ノ宮にしまして、八歳天ノ下治しめしき。」
- 「袁本杼ノ命(繼體天皇)、伊波禮之玉穗ノ宮にしまして、天ノ下治しめしき。」
- 「廣國押建金日ノ命(安閑天皇)、勾之金谷ノ宮にしまして、天ノ下治しめしき。」
- 「建小廣國押楯ノ命(宣化天皇)、楡堀之廣入野ノ宮にしまして、天ノ下治しめしき。」
- 「天國押波流岐廣庭ノ天皇(欽明天皇)、師木島之大宮にしまして、天ノ下治しめしき。」
- 「沼名倉太玉敷ノ命(敏達天皇)、他田ノ宮にしまして、壹拾四歳、天ノ下治しめしき。」
- 「橘ノ豊日ノ命(用明天皇)、池ノ邊ノ宮にしまして、參歲天ノ下治しめしき。」
- 「長谷部ノ若雀ノ天皇(崇峻天皇)、倉楯ノ柴垣ノ宮にしまして、四歲天ノ下治しめしき。」
- 「豊御食炊屋比賣ノ命(推古天皇)、小治田ノ宮にしまして、參拾七歲天ノ下治しめしき。」

以上列擧のこれらの叙述、それが『古事記』の中卷・下卷に盛られた甚だ豊富多彩にしてまた多岐錯綜せる外貌・内實に、確乎整然たる統一を與へてゐる事實を、我々は看過することができない。否、そこにこそ、古代日本人の價値觀の上に於て最も重要な意味の存することを、我々は觀得せざるを得ない。何故ならば、該全卷を通じて例へば針の縫目の如くに點綴的に掲揚せられてゐるこれら一定形式の叙述の中に、まさしく我々は、そこ

に一貫して明かなる價值的理念を見出し得るからである。名は固より實を伴ふ。以上の簡明完美なる表現によつて顯示された事實の中に、我々は、『古事記』の中卷・下卷に明示されてゐる理想的なるもの、即ち最高の價值的存在自體を洞觀し把握することができると考へる。

事實に於て、「神倭伊波禮毘古ノ命、畝火之白禰原ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき」といふこの表現の中に、我々は最も具體的なる價値の創造・實現の働き、或はまた最も完全なる價値判斷的事象を觀得することができると考へる。そしてこの場合、「神倭伊波禮毘古ノ命」は一切を價値づけられる最高貴なる價値主觀と考へ得られ、「畝火之白禰原ノ宮」はその價値主觀の於て存在せられる場所であり、「天ノ下」が最包括的價値客觀であり、そして「治しめし」は最純粹の價値作用と考へられるのである。即ち上述の價值的存在構成の三要素が、この簡明なる表現の裡に、完美に顯示されてゐると思ふのである。こゝに於て、『古事記』の中卷・下卷を根據として古代日本人の價値觀を明かにせんとする我々の意圖の遂行は、當然にも以上の三構成要素の價値現象學的即ち解釋學的吟味から始められなければならぬ。

尙、以上の價值的三要素が完全なる統一に於て最高の價值的存在自體即ち理想的なるものを成立實現せしめる時、それはやがて我が國體の精髓を成立實現せしめる所以のものとなるであらう。何故ならば、我が國體の精髓は、いふまでもなく『日本書紀』に掲げられてゐる天祖の御神勅に明示されて居り、そしてそれは結局、「皇孫が葦原の千五百秋の瑞穗國に王となりて無窮にこれを治される」といふところに、その中核があると解されるが、そ

のことが、以上の、例へば「神倭伊波禮毘古ノ命、畝火之白鬮原ノ宮にましまして、天ノ下治しめしき」なる表現の中に、完全に、遺すところなく顯示されてゐると思はれるからである。即ち、「皇孫」は「神倭伊波禮毘古ノ命」であられ、「葦原の千五百秋の瑞穂國」は「天ノ下」であり、「治らす」は「治しめす」と同一と解し得られるからである。されば初めに列擧せる同一形式の表現の根本的なる價值的理念は、結局天祖の御神勅のそれと同一のものであり、そしてそれが我が國體の精髓的なるものを示現するが故に、以上の價值的三要素を究明することは、やがて我が國體の精髓を學問的に闡明する所以の道ともなり得るであらうことを、我々は信するのである。別言するならば、『古事記』中卷・下卷に一貫的に示された價值的理念は、天祖の御神勅に明かにされたそれと全く同一であり、そして『古事記』上卷神代之卷に示されたそれは、やはり天祖の御神勅に明かされてゐるものゝ漸層的確立といふところにあつたが故に、結局『古事記』の中卷・下卷の内容は、上卷に示された理念そのものゝ自己開展に外ならぬと、當然にもいはれ得るのである。渾沌カオスの神話の宇宙コスモス的自己開展、そこに所謂歴史が開け來つたのである。

一 價 値 主 觀

ゾルレンザイエンデス Sollensendes であると共にまたザインゾルレンデス Seinsollendes である價值的存在自體の、そのノエシス noesis 的象面はゾルレン的性質の所謂價値主觀であり、そのノエマ noema 的象面は

ザインの價值客觀であり、またそれら兩者間の志向的相關關係そのものがノエシスのノエマ的 noematisch なる價值作用そのものであるとするならば、最初に列擧した表現が示すところの價值的存在自體に於て、ノエシスの象面としてのゾルレン的價值主觀に當られる存在は、「命」(天命)も「御子」も「比賣ノ命」も御一緒に申上げる。—以下同様—であらせられる。そしてノエマ的象面としてのザイン的價值客觀は、「天ノ下」であり、その間のノエシスのノエマ的價值作用は、「治しめし」である。併しながら、これらの三成素は結局一つであり、最初より不可分割的に全存在的一體性を成して、最高の價值的存在即ち理想的なるもの、即ち我が國體の精髓的なるものを結成してゐるのである。次に先づ價值主觀について見る。

『古事記』上卷神代之卷に於て、價值主觀は神々として表現せられ、その最も純粹にして最高なるものは天々々の「命以ち」としての「あきつみかみ」として仰がれた。中卷・下卷に於ける上述の「命」はいふまでもなくこの「あきつみかみ」であらせられる。そこには一貫した連結のみがあり、神代と人皇時代との間に些の間隙もあるのではない。天孫の御降臨と神武天皇の御即位とは直接に連続してゐるのである。それ故に、紀元二千六百年といふも、それは神武天皇の御即位以來二千六百年といふ意味であつて、我が國が初まつてから二千六百年といふのではない。我が國の初まりは悠遠なる神代の昔にあり、その極るところを知るに由がない。只、『古事記』では神倭伊波禮昆古ノ命(神武天皇)から中卷とされ、『日本書紀』では神日本磐餘彥天皇(神武天皇)から卷第三とされ、そして天皇の御即位の年から年月を記してあるが故に、この年を紀元元年とし、これを基として寶祚の無窮を數へ

てゆくことにしたのである。三宅米吉先生も明言して居られた如く、我が紀元元年は我等の知り得る限りの連続した曆年の始であるといふに過ぎず、それが建國第一年であるといふ意味のものではない。今日さう考へられてゐるとしても、眞實の建國はそれ以前にあり、少くともそれは天孫の御降臨にまで遡つて考へられなければならない。その時を肇國といつて、建國と區別はしてゐるが、その肇國と建國との間に些の間隙もあるのではない。神代に於ける天^ツ神々の「命以ち」が直ちに人皇時代の「天皇^{すむみかみ}」であられるのである。その間の連続關係が『古事記』上卷の終りには次の如く述べられてゐる。

「是の天津日高日子波限建鸕草葺不合^{みかは}命、姫玉依毘賣命に娶ひまして、生みませる御子の名は、五瀬^{みせ}命。次に稻氷命。次に御毛沼^{みけぬま}命。次に若御毛沼^{わかみけぬま}命、またの名は豊御毛沼^{とよみけぬま}命、またの名は神倭伊波禮毘古^{かむやマト}命〔四柱〕。」

かく瞭然たる御系譜によつて、神代と人皇時代との連続關係が示されてゐるのである。そしてこの御系譜が今日に至るまで連綿として續いてゐることは、固よりいふまでもない。換言すれば、一系の皇孫によつて承継がせられる寶祚は、神代の昔より確立されて居り、そしてその確立は、天地初發以來の神々の活動によつて漸層的に完成されたものであるが故に、我が國體の淵源は天地初發の時に、即ち天之御中主^{あまのみちぬす}神に繫りを有つこととなり、寶祚の絶對性・神聖性の基づくところ、洵に悠遠であるといはなければならぬ。

この寶祚確立の漸層的完成は、神代の初めにありては、全く天然自然に無意識の裡になされ來つた如くである。それが漸く自覺的になされるに至つて、天祖の御神勅も現はれるに至つたと思はれる。そのやうな御自覺は

人皇時代に至つて愈々明かとなり、そしてそれによつて寶祚の絶對性・神聖性も愈々確乎不拔のものとなされるに至つたのである。

最も純粹にして高貴なる價值主觀としての、即ち「治しめし」を實行されるその主體としての「命」の御自覺は、『古事記』の中卷・下卷に於ては、例へば次の如き叙述の中に明かであらうと思ふ。

(イ) 神倭伊波禮毘古ノ命、その同母兄五瀬ノ命と二柱、高千穂ノ宮にましまして議りたまはく、何れの地にまさばか、天ノ下の政をば平けく聞しめさむ、猶東のかたにこそ、行でまさめとのりたまひて即ち日向より發して、筑紫に幸でましき。」

(ロ) かれここに詔りたまはく、吾は日ノ神の御子として日に向ひて戦ふことふきはす。」

(ハ) ここに天皇詔りたまへるは、奴や、己が家を、天皇の御舎に似て造れりとのりたまひて、即ち人を遣はして、その家を焼かしたまふ時に、その大縣主誼ち畏みて、稽首白さく、奴にあれば、奴ながら覺らずて、過ち作れり。いと畏しとまをしき。」

(イ)に於て、「天ノ下の政をば平けく聞しめす」こと、即ち「治しめし」に當つての御苦心の御狀が明かであり、(ロ)に於て「日ノ神の御子」、即ち天照大御神の直系としての御反省の御貌が明かである。これらは何れも、神倭伊波禮毘古ノ命の「天ノ下」を「治しめす」その主體としての御自覺の結果と思はれる。(ハ)は大長谷ノ若建ノ命が皇居に似せて私宅を造作してゐた志幾之大縣主を御懲戒になつた物語であり、「天皇」としての尊嚴な御地位を強く御自覺なされてゐたことの證とせられ得る。かくの如き御自覺は、寶祚を先天的に根據づけてゐるところの天々神々の「命以ち」の御自覺の上に、一層強められ來つたものと思はれる。「命以ち」なる言葉は中卷にも處々に

使用されて居り、例へば、神倭伊波禮毘古命の御東征の物語に於て、熊野ノ村にいでまして、天皇始め全軍悉く毒氣に觸れて病み伏された時、熊野の高倉下が獻つた一振の横刀を御受け取り遊ばすことによつてその熊野の山の荒ぶる神共を皆切り付されたこと、またそれによつて全軍悉く毒氣から寤められたことが記されてゐるが、その横刀を高倉下が獻つた抑々の初因は、「天照大神高木ノ神二柱の神の命もちて、建御雷ノ神を召して詔りたまはく、葦原ノ中ノ國は、甚く騒ぎてありけり。我が御子たち不平みますらし。かの葦原ノ中ノ國は、專汝が言向けつる國なり。かれ汝建御雷ノ神降りてよとのりたまはつたことにあるとなされてゐる。また八咫鳥の嚮導に従ひ給ひしことも、「高木ノ大神の命もちて、覺し白したまはく、天ツ神の御子、ここより與つ方にな入りましそ。荒ぶる神いと多かり。今天より八咫鳥を遣さむ。かれその八咫鳥導きてむ。その立たむ後より幸でますべしと、覺しませたまひしに因つてあるとなされてゐる。即ち、「命」の「治しめし」の背後には、常に天ツ神々の「命以ち」があり、この「命以ち」がその「治しめし」を愈々正當化し、絶對化し、神聖化するものとなつてゐたと解されるのである。かく「命」の背後に天ツ神々あり、その「治しめし」は常に天ツ神々の啓示、加護或はまた天譴と思はれるものゝ下にあることとなる。このことは到處に見られる神示・神助・或はまた懲戒と解されるものの物語によつて明かであらう。右の高倉下の靈劍奉獻も、八咫鳥の嚮導も、神示・神助の意味を有つものと解される。息長帯日賣命(神功皇后)の新羅征伐も、「西の方に國あり。金銀をはじめて、目の耀く種種の珍寶その國に多なるを。吾今その國を歸せたまはむ」「今定にその國を求めむと思はさば、天ツ神地ツ祇、また山ノ神海河ノ神たちに悉

に幣帛奉り、我が御魂を御船の上に乗せて、眞木の灰を瓠に納れ、また箸と葉盤を多に作りて、皆々大海に散らし浮けて、度りますべしと詔りたまひし天照大神並に底筒男・中筒男・上筒男の三柱の大神の言教へ覺しに基づいたものであり、またその、「順風盛りに吹きて、御船浪のまにまにゆきつ。かれその御船の波、新羅の國に押し騰りて、既に國半まで到りき」といふ戦勝も、まさしく神助に因つたものと思はれる。併しながら、神の力はまた時に天譴力となつても現はれた如くである。例へば、御眞木入日子印惠命の御世に、「役病多に起り、人民死せて盡きなむ」とせるは、大物主大神が「意富多多泥古をもて、我が御前を祭らしめたまは」ざりしためとせられ、また伊久米伊理毘古伊佐知命の皇子本牟智和氣御子が、「八拳鬚心前に至るまで御言とはす……物言はむと思ほして、思ほすがごと言ひたまふ事なかり」しは、出雲大神の「我が宮を天皇の御舍のごと造りたまは」ざりしための祟であるされ、或はまた帶中日子天皇の早く崩御遊ばしたのは、新羅征伐の神託に信を置かれなかつたために、「神大く忿らした結果となされてゐるのである。以上の如き神示・神助・懲戒と思はれるものに應へる道は、一に誠心誠意神を齋き祭ることではなければならぬ。神への奉齋がかくて「命」の重要な務めの一つとなる。かくて、御眞木入日子印惠命の御世には、妹豊鉏比賣命をして「伊勢の大神の宮を拜き祭りたまはしめ、また「意富多多泥古命を、神主として、御諸山に、意富美和之大神の御前を齋き祭りたまひ」、その他諸々の神々を祭りたまはつた。また伊久米伊理毘古伊佐知命の御世にも、倭比賣命をして「伊勢の大神の宮を拜き祭りたまはしめ、またその御子本牟智和氣御子をして「出雲大神の宮を拜きしめに遣り

たまひ、「菟上」王を返して、神ノ宮を造らしめたまはつたのである。倭建ノ命は、東夷の言向け和しの「命を受けたまはりて、罷り行でます時に、伊勢ノ大神の宮に参りまして、神の朝廷を拜みたまひ」、また息長帯日賣ノ命が新羅征伐に成功された折には、「墨江ノ大神の荒御魂を、國守ります神と鎮め祭りて、還り渡りまし」、尙、伊邪本和氣ノ命が會婆加里を討たれ給ふた際にも、「祓禊して」「神ノ宮を拜ま」せられた。かくの如く、神々を奉齋し、神と御一體になられることによつて、「命」は「治しめし」の御主體としての御自覺を愈々強められ、寶祚の絶對性・神聖性を愈々確乎不拔のものとなされ來つたのである。

「治しめし」の御主體としての御自覺は、やがて臣民との間の儼たる分を明かに御意識せられることを意味するであらう。前述の、大長谷ノ若建ノ命が志幾之大縣主の僭上を御懲戒になつた物語に於ても、君臣の分を明かにせられた意味が汲み取られ、また天皇が葛城山に登り幸でませる時に、「既に天皇の鹵簿に等しく、その装の狀、また人どもも、相似て別れ」ざるを、天皇が見遣らして、「この倭の國に、吾を除きてまた君は無きを。今誰ぞかくて行く」と問はしめられたことの中にも、臣下の分として大君に擬へることの非を強く御咎めになつた狀が明かである。男淺津間ノ若子ノ宿禰ノ命が「天ノ下の氏氏、名名の人どもの、氏姓の忤ひ過てることを愁ひまして、味白禱の言八十禍津日ノ前に、玖訶瓮を据ゑて、天ノ下の八十友緒の氏姓を定めたまはつたことも、人民間の分を明かにせられたことで、この君臣明分の事に關聯づけて考へ得ることと思はれる。

この君臣の分の自らに明かであることの事理は、固より臣民によつても愈々強く意識せられるに至つてゐたこ

とはいふまでもない。例へば次の例にそれが明かである。

(イ)「古より今に至るまで、臣連の王の宮に隠ることは聞けど、王子の臣の家に隠りませることは未だ聞かず。是を以て思ふに、賤奴意富美は、力を竭して戦ふとも、更にえ勝ちまつらじ。」

(ロ)「その大縣主懼ぢ畏みて、稽首白さく、奴にあれば、奴ながら覺らずて、過ち作れり。いと畏しとまをしき。かれ稽首の御幣物を獻る。」

(ハ)「然れどもかの大長谷ノ天皇は、……天ノ下治しめしし天皇にますを。今單に父王之仇といふ志をのみ取りて、天ノ下治しめしし天皇の御陵を悉に壞りなば、後の世の人必ず誹りまつりてむ。」

(イ)は穴穗ノ御子の崩後、大長谷ノ王が、都夫良意富美の家に逃げ隠れし目弱ノ王を討たせられるために、その家を圍み給ひし折、その家の主都夫良意富美が「自らまゐ出で、佩ける兵器を解きて、八度拜みて、白し」上げた言葉であるが、臣下としての分をよく自覺した上での言上と解される。(ロ)は前述の志幾之大縣主が、大長谷ノ若建ノ命の御懲戒を受けた際の恐懼した狀であるが、臣下として名分を紊した罪を悔いるの態度が、よく表明されてゐる。(ハ)に於ては、意富那ノ命が御陵に對し奉つて特に敬懼の情を示されたことを現はしてゐるのである。また白髮ノ大倭根子ノ命の御世、山部ノ連小楯が「針間ノ國の宰に罷れる時に、その國の人民名は志自牟が新室に到りて宴し、その「盛りに樂げて、酬なるとき、次第のままに皆舞ひ、鼈の傍に居た二人の童にも舞はしめたのであるが、その二人の童こそ、さきに穴穗ノ御子の御世、市ノ邊之忍齒ノ王の殺されし折に逃げ去りし二王子、意富那ノ王と袁那ノ王で在られることが、その舞ひの歌から初めて知られるに至つたその時に、その「小楯、連聞き驚

きて、床より墮ち轉びて、その室なる人どもを追ひ出して、その二柱の御子を、左右の膝の上に坐せまつりて、泣き悲みて、民どもを集へて、假宮を作りて、その假宮に坐せまつり置きて、驛使上りき」と叙べられてゐる。この二王子はやがて、袁祁ノ王は顯宗天皇に、意富祁ノ王は仁賢天皇になられるのであるが、右の小楯ノ連の驚き懼れし形は、當時の人々の寶祚に對し奉つて有つてゐた恭敬の念や態度をよく示すものといへるであらう。かくの如く臣民も、寶祚の絶對性・神聖性をよく自覺して固より疑ふことがなかつた。

寶祚の絶對性・神聖性は、元々神代以來不拔に確立されてゐたのであるが、それに對する「命」の御自覺、並に人民の自覺も以上の如く次第に明かなるものとなり來つたのである。随つて寶祚に登ります「命」も、最純粹・最高貴なる價值主觀として、價値の創造・實現、即ち「天ノ下」の「治しめし」に、御自覺的に全身全靈を打ち込められるに至ることは自然の勢ひであつたと思はれる。先にも述べた如く、神倭伊波禮毘古ノ命は、「何れの地にまさばか天ノ下の政をば平けく聞しめさむ」と宣はせられて東のかたに向はせられ、「荒ぶる神等を言向けやはし伏はぬ人どもを掃ひ平げたま」はつたのである。御眞木入日子印惠ノ命の御世、役病流行に當りては、天皇殊の外愁ひ給ひて、盛に天神地祇を祭り給ひ、「天ノ下平ぎ、人民榮えなむ」ことを御軫念遊ばされ、「天ノ下平ぎ、人民當み榮」ゆるに至つて、「ここに初めて男の弓端の調、女の手末の調を貢らしめたま」はつたのである。また四道將軍の御派遣も、「その伏はぬ人どもを言向け和さしめ」るために外ならなかつた。大雀ノ命の御仁慈については人皆のよく知るところ、即ちその叙述は次の如くになされてゐる。

「ここに天皇、高山に登りまして、四方の國を見したまひて、詔りたまひつらく、國中に烟たえず國皆食し、かれ今より三年といふまでは、悉に百姓の課役を除せとのりたまひき。是を以て大殿の破れ壞れて、悉に雨漏れども、かつて綖ひたまはず、穢をもちてその漏る雨を受けて、漏らざる處に遷り避けましき。後に國中を見したまへば、國に烟滿ちたりき。かれ百姓富めりとおもほして、今はと課役科せたまひき。是を以て百姓繁えて、得使に苦まざりき。かれその御世を稱へて聖の御世とまをす。」

この聖は即ち「日知」であり、天ツ日嗣を知らずといふ意味であつて、「聖の御世」とは「聖帝の御世」の意味である。神聖性がこゝに明たり儼たりといはなければならぬ。

かくの如く、寶祚は絶対、神聖であらせられ、「天ノ下」治しめし」の御大業は、「天皇」たる「命」によつて、天ツ神々の命以ちによつてことよさせられたる至重至大の御業として御自覺遊ばされた。それがために、特に深き御反省の結果御即位の御讓渡を念とせられる「命」も在らせらるるやうになつた。神倭伊波禮毘古命の御子神八井耳命は、弟建沼河耳命に御即位をお譲りになつて、「吾は仇を得殺せず、汝が命既に得殺せたまひぬ。かれ吾は兄なれども、上とあるべからず、是を以て汝が命上とままして天ノ下治しめせ、僕は汝が命を扶けて、忌人となりて仕へまつらむ」と白された。また前述の市邊之忍齒ノ王の御子意富祁ノ命も、その弟袁祁ノ命に御即位を讓られて、「針間の志自牟が家に住めりし時に、汝が命名を顯はしたまはざらましかば、更に天ノ下知らさむ君とはならざらましを。既に汝が命の功にぞありける。かれ吾れ兄にはあれども、猶汝が命先づ天ノ下を治しめしてよ」

と申されてゐる。大雀ノ命と宇遲能和紀郎ノ子との二柱も亦、永く相互に「天ノ下」を相譲り給つた。穴穂ノ命も初め「我は打延へたる病し有れば、日繼え知らさじ」と詔り給はれて御辭いなまれた。これらのことすべて、寶祚の絶對性・神聖性、「天ノ下」治しめしの至重至大性を御自覺遊ばされての御事と思はれる。

かく最純粹・最高貴の價值主觀としての「命」が、天ノ神の「命以ち」即ち現御神として、絶對・神聖の寶祚を満たして最初より在られた故に、價值づけの作用、即ち價値の創造・實現の作用はすべてここにその根源を有ち、眞・善・美・聖なる積極的價値と偽・惡・醜・俗なる消極的價値との區別も亦自らここにその標準を有つこととなるのである。例へば、頭椎石椎かぶつしをもちて土雲八十建を撃つことは「善じ」とせられ、日ノ神の御子として日に向ひて戰ふことは「ふさはず(不真)」とされるのである。「命」に隨順なるものは「淨き公民(兄比賣・弟比賣)」であり、伏はぬものは「惡人・賤奴・荒ぶる神(土雲八十建・登美毘古・熊曾建・出雲建・蝦夷等)」「禮なき人(熊曾建二人・笠紫ノ君石井等)」「邪心よこしまなこころを起せるもの(建波邇安ノ王)」であり、己が君を殺せまつれるは「不義(會婆訶里の所爲)」とされ、謀反心は「異しき心」「汚きたき心」などなされるのである。そしてこれらの價值づけの標準たるものが、絶對にして神聖なる最高の價値的存在者であり、即ち「恐み」の對象として存在されてゐるものである。

三 價 値 客 觀

最純粹・最高貴の價值主觀としての「命」即ち現御神の價值づけの對象となるものは、最初に列舉した叙述に

明かである如く、「天ノ下」である。「天ノ下」は最包括的なる價值客觀と解される。この「天ノ下」なる言葉は、上卷即ち神話の中には見出され得ない。併しながら、その意味の上から觀じて、これが神話の中の「葦原ノ中ノ國」に當ることはいふまでもないであらう。尤もこの場合その中ノ國とは、高天ノ原並に黄泉國に相對立した意味のそれではなく、それらすべてを統合した意味の中ノ國である。大國主人命の出雲平定によつて先づ對立的意味の中ノ國と黄泉國とが大體に於て統合せられ、次に天照大御神の中ノ國の言向け平し（こむ）によつて高天ノ原と中ノ國とが完全に連續し、そしてその極に、天孫降臨の事實によつて以上三種の世界が完全に統合されたのであるが、こゝに寶祚が名實共に不拔に確立されるに至つたのである。「古事記」神話を一貫して存する價値的理念は、かくの如き究極に到達せんがためのものであつたと思はれる。かくして統合された三種の世界が、眞實の意味に於ける中ノ國であり、そしてこの意味の中ノ國は自ら大宇宙であり、即ち八紘である（前掲小著『日本精神の根本問題』第六「純日本精神に於ける中的なるもの」参照）。これが中卷・下卷に所謂「天ノ下」として叙べられてゐるものと解される。假りに存在學的に觀する時、これは全存在そのものであるともいひ得られるであらう。

併しかくはいつでも勿論、その當時の人々が、今日我々が存在學的立場に於て全存在といつてゐる如きものを意識的に考へてゐたとなすものではない。只、無意識直感の裡にはあつても、そのやうなものを全宇宙として、八紘として、即ち「天ノ下」として感得し、それが「命」によつて治されるものと信じ、そこに些の疑惑をも起さなかつたといふのである。元來存在學の意味の全存在といふも、それは我なる中心を離れて超越的に獨立に

存在してゐる如きものではない。むしろそれは中心たる我の認識の及ぶ限り、我の感得の達する限りの全世界といふが如きものであるといふことができる。随つてそれはその限極が一定に不動的に固定してゐるやうなものではない。我の認識が擴大し、我の感得が豊富になるに随つて、漸次成長し發展してゆく性質のものである。即ちそれは常に一定の限界は有つが併し永遠に固定的な限極は有つことのなき世界といはなければならぬ。刻々に我を中心としてゐる、我が認識の及ぶ限り我が感得の達する限りのその全世界が、所謂全存在として、我々にとつて存在學的に問題となるのである。かくて全存在は、刻々に成長し發展しゆくものでなければならぬ。「古事記」神話の中の「中^ツ國」は、前述の如く、かくの如き意味の世界として考へ得られるが、その中巻・下巻の中の所謂「天下」も亦、かくの如き意味の成長的・發展的世界として觀ぜられるのである。随つてそれは「命」の在られる場所を中心として次第に擴げられる、所謂常に一定の限界はあるが併し決して固定的限極のない世界として考へられる。随つてそれは例へばインド・アリアン民族の中國思想や、漢民族の中國・中夏思想に於ける「中國」とは自ら異るところのものとならなければならぬ。何故ならばインド・アリアン民族の中國は、北はヒマラヤ山、南はヴィンドヤ山、西はヴィナシナ、東はブラヤーガを以て限局されてゐる固定的な一定地域であるときれ、また漢民族の中國なるものも、東夷・西戎・南蠻・北狄によつて限定せられたる固定的局限的地域となされてゐるからである。そこでは發展や成長は決して考へ得られない。一定の局限的固定的地域のみである。然るに我が「天下」は中心を有ち、限界は常に有つてゐながら、その限界の刻々に發展し成長しつゝある世界であ

る。例へば先づ神倭伊波禮毘古ノ命が日向に居られし時は、「天ノ下」はそれを中心とする一帯の地であつたと思はれ、そしてそれが次第に、日向より笠紫へ、笠紫より吉備へ、吉備より浪速へと中心が遷るに随つて伸び擴がり、熊野より吉野に及び、畝火之白禰原ノ宮にまします頃には、その「天ノ下」は大和を中心とせる、そして日向をも含める一圓の地であつたと思はれる。それが當時の認識の及ぶ限り、感得の達する限りの全世界、即ち八紘であつたと思はれるのである。併しそれが、息長帶日賣ノ命の新羅征伐や品陀和氣ノ命の賢人を百濟ノ國に求めるに至つた頃になると、その「天ノ下」は更に擴がつて三韓をも包容する世界となるに至つたのである。かくの如く限極の無い全存在として、刻々に成長發展する八紘として、「天ノ下」は常に存在してゐたと思はれる。成長し發展するものには常に確たる中心が必要である。中心を明かにすることは「天ノ下」を明かにすることである。各御世々々に特に皇居を明示されてゐる所以と思はれる。

「治しめし」の對象、即ち價値客觀としての「天ノ下」の内容として先づ第一に人民がある。百姓・公民。またはうつしき青人草と呼ばれてゐる。この「おほみたから」または「青人草」が、神裔にまします「命」と儼乎たる分に於て別たれてゐることは前述の如くである。青人草が神ではないといふことは、秋山之下氷壯夫と泰山之霞壯夫との物語の中に、「我が御世の事、能くこそ神習はめ、またうつしき青人草習へや。その物價はぬ」といふ言葉があることによつても明かであらう。即ち償ふべきものをも償はないといふが如き所爲は、神の御所行には無いところであるが、青人草の所爲には有ることが、こゝに明かに意味されてゐるのである。かくの如き不

完全なる青人草も、「すめらみこと」の下「おほみたから」として、常に限り無き聖恩・御仁愛に浴し、そして、御世々々を例へば「聖の御世」と稱へて、現實に生活を謳歌し得てゐたのである。

- (イ)「この天皇の御世に疫病多に起り、人民死せて盡きなむとす。ここに天皇愁ひたまひて、神床にまします夜、大物主ノ大神、御夢に顯はれて、……我が御前を祭らしめたまはば、神ノ氣起らず、國平ぎなむとのりたまひき。……ここに天皇大く歡びたまひて、天ノ下平ぎ、人民榮えなむと詔りたまひて……天ツ神地ツ祇の社を定めまつりたまひき。」
- (ロ)「かれ天ノ下平ぎ、人民富み榮えき。ここに初めて男の弓端の調、女の手末の調を買らしめたまひき。」
- (ハ)「かれ百姓富めりとおもほして、今はと課役科せたまひき。是を以て百姓榮えて、役使に苦まざりき。」

(イ)(ロ)は共に御眞木入日子印惠ノ命の御世の御事であり、人民の愁を愁とし、その歡びを歡びとせさせ給つた御仁慈が明かである。(ハ)は前にも述べた如く、大雀ノ命の御仁愛を明かにしたものである。

「天ノ下」の中にまた自然物がある。これがまた「治しめし」の對象として大御心の深き御關心・御同情の下にある。荒蕪の地が池や田や溝に作られたことは、例へば、伊久米伊理昆古伊佐知ノ命、大帯日子淤斯呂和氣ノ天皇、大雀ノ命の御世等に記されてゐる事柄である。太陽を此の上もなく崇拜されたことは「日に向ひて戦ふことふさはす」の一句に明白であるが、草木鳥獸に關しての厚き大御心の物語も全巻を通じて到る所に存してゐる。

倭建ノ命が「能煩野に到りませる時、國思ばして歌ひたま」へる御歌、

「倭は、國のまほろば、たたなづく、青垣山、隠れる、倭し、美し。」

「命の、全けむ人は、曼菰、平群の山の、隠白櫛が葉を、替華に挿せ、その子。」

「はしけやし、吾家の方よ、雲居起ち來も。」

これらの中には、郷土たる國土に對する切々の情思が披瀝せられてゐる。また尾津、前の一ツ松の許でよませられた

「尾張に、直に向へる、尾津の崎なる一ツ松、吾兄を、一ツ松、人にありせば、大刀佩けましを衣着せましを、一ツ松、吾兄を。」

の中には、一樹に寄する情懷が示されて居り、御病急になりし時によまれた御歌

「嬢女の、床の邊に、吾置きし、つるぎ大刀、その大刀はや。」

に於ては我々は、一振りの大刀に對して有たれた命の限り無き愛情の情を觀得することができる。或は大雀、命が、「奴理能美が飼ふ蟲、一度は匂ふ蟲になり、一度は殻になり、一度は飛ぶ鳥になりて、三色に變る奇しき蟲」をば、「吾も奇しと思へば、見に行かな」と詔りたまひて幸でましたことの中には、蠶に對する異常の御關心が察せられ、また本牟智和氣、命が「御言とは」ざりしたために鶴を追ひ尋ねられた物語や、多遲摩毛理が常世、國に到りて非時、香菓を求め來つた物語、倭建、命の后にちが八尋、白智鳥を哭く哭く追ひいでました物語など、何れも自然物に關係を有つた、涙無くしては讀まれぬ哀情物語である。また大雀、命の御世の、枯野の船の物語に於ては、何人か一本の樹をも蔑にされざる物資尊重の大御心の現れを觀ぜ得ぬものがあらう。即ちその物語は次の如くである。

「この御世に、兎寸河の西の方に、高樹ありけり、その樹の影、朝日に當れば、淡道島に遠び、夕日に當れば、高安山を越えき。かれこの樹を切りて船に作れるに、いと捷く行く船にぞありけり。時にその船の名を枯野とぞ謂ひける。かれこの

船を以て、且夕に淡道島の清水を酌みて、大御水献りき。茲の船の壞れたるもて、鹽を焼き、その焼け遣れる木を取りて、琴に作りたりしに、その音七里に聞えたりき。」

あらゆる人民並に自然物に對される大御心が既にかくの如くであるとすれば、人民並に自然物の一切が、「命」に對し奉つて絶對隨順の誠を披瀝せんとすることも、蓋しまた當然といはなければならぬ。

(イ)「また從に仕へまつらむやと問はしければ、仕へまつらむとまをしき。かれすなはち稿を指し度して、その御船に引き入れて、稿根津日子といふ名を賜ひき。」

(ロ)「汝は誰ぞと問はせば、僕は國々神名は石押分の子、今天神の御子幸でますと聞ける故に、まる迎へまつるにこそとまをしき。」

(ハ)「ここに多遲摩毛理、綾四綾矛四矛を分けて、大后に献り、綾四綾矛四矛を、天皇の御陵の戸に献り置きて、その木實を擧げて、叫び哭びて、常世ノ國の非時ノ香ノ菓を持ちまゐりて傳ふとまをして遂に哭び死にき。」

(ニ)「海原の魚ども、大きな小き、悉に御船を貧ひて渡りき。ここに順風盛りに吹きて、御船浪のまにまにゆきつ。かれその御船の波、新羅の國に押し蹴りて、既に國半まで到りき」

(イ)は神倭伊波禮毘古ノ命御東征の際、宇豆毘古が海路御案内の狀であり、(ロ)は石押分の子が御出迎への折の模様である。心からの隨順を示すものと思はれる。(ハ)は多遲麻毛理が勅命を奉じて漸くに非時ノ香ノ菓を求め歸りに、伊久米伊理毘古伊佐和命既に神去り給ひてありしたため、悲しみの餘り、御陵に至りて泣き死に、死にすることであり、その至誠純忠惻々として人を打つものがある。(ニ)は息長帶日賣ノ命の新羅御征伐の折に、魚や風や波などの自然物さへもよく隨順性を顯示したことを明かにしたものといへる。「おほみたから」のみでなく、

「山川も依りてつかふる神の御代」が、常に現實的であつたのである。

かくの如くに、「天下」は悉く「天皇」に「まつらふ」ものとして存してゐる。それは「治しめし」によつて限り無き御仁愛に照し惠まれた自らなる反映である。價值主觀と價值客觀とはもとゞり相關的關係に於て結合せられてゐるのである。價值主觀の統一性がかくて價值客觀に統一を與へるものとなる。「天下」の統一は、まさしく寶祚によつて初めて可能であるといはなければならぬ。かくて價值客觀個々に於ける價値の有無、即ちそれが眞・善・美・貴・清・吉などの積極的價値を有つか、はたまた偽・惡・醜・賤・汚・凶などの消極的價値性のものかは、以上の統一そのものに適合するか否かによつて自らに決定される事柄となる。かくて例へば皇軍の「ぞえ伏し」を「寤め」しめた横刀は吉きものとされ、義に勇む久米の子はみつみつしとされ、「命」の御意に適ふ人々は愛媛女・清き公民などといはれ、論語や千字文を貫れる人は賢人といはれるのである。また反對に、反逆の心は穢き心・異しき心といはれ、その人は禮なき人・賤奴・惡人荒ぶる神などいはれ、生剝逆剝・阿羅溝埋等々の所爲は穢はしき罪となされるのである。併しこれらの消極的價値の保持者即ち價値無きものと雖も、最純粹の價値作用としての「治しめし」によつては、やがて有價値者にまで轉換せしめられ得るものとして存在してゐた。「治しめし」によつて救済されざるものは在り得ぬとされるのである。

四 價 値 作 用

「治しめしき」「治しめし」は、清明心の働きによつて實現せられる最純粹の價值作用といへる。「治しめし」は「知らず」ことであり、「知らず」といふことは不完全な部分的個存在を包容・純化・更生せしめて完全なる全體的全存在性たらしめること、即ち眞・善・美化の作用を實現することである（前掲「純日本精神の價值觀」参照）。現實的には御稜威・御仁愛によつての世界光被として現はれる。「天下」はこれによつて「自ら照り明るき」世界となるのである。「何れの地にまさるばか、天下の政をば平けく聞しめさむ」といふとき、その政を平けく聞しめすといふことが、「知らず」ことであり、「治しめす」ことである。この「治しめし」のために「日向より發して……荒ぶる神等を言向けやはし、伏はぬ人どもを掃ひ平げたまひ（神倭伊波禮毘古ノ命）」「大吉備津日子ノ命と若建吉備津日子ノ命とは……吉備ノ國を言向け和し、」「大毘古ノ命をば、高志道に遣はし、その子建沼河別ノ命をば、東の方十二道に遣はして、その伏はぬ人どもを言向け和さしめ、また日子坐ノ王をば、且波ノ國に遣はして、玖賀之御笠を殺らしめたまひ（御眞木入日子印蕪ノ命）」「西東の荒ぶる神、伏はぬ人どもを平けたまひ（小碓ノ命即ち倭建ノ命）」「また一軍を整へ、御船を變めて、度り幸でまし（息長帶日賣ノ命）」などせられたのである。またこの「治しめし」のために、「血沼ノ池を作り、また狭山ノ池を作り、また日下之高津ノ池を作り（伊久米伊理毘古伊佐知ノ命）」「坂手ノ池を作りて、その堤に竹を植えしめ（大帶日子游斯和氣ノ天皇）」「茨田ノ堤、茨田ノ三宅を作りたまひ、また丸邇ノ池、依綱ノ池を作りたまひ、また難波の堀江を堀りて、海に通し、また小橋ノ江を堀り、また墨ノ江の津を定めたまひ（大雀ノ命）」もせられ、或はまた「意富多多泥古ノ命を、神主として、御諸山に、意富美和之大神の御前を齋き祭り……

伊迦賀色許男、命に仰せて、天の八十平瓮^{ひらか}を作り、天^ツ神地^ツ禊の社を定めまつりたまひ(中真木入日子印惠、命)、「伊勢の大神の宮を拜き祭りたまひ(倭比賣、命)」、「伊勢、大御神の宮に参りまして、神の朝廷^{みかど}を拜みたまひ(倭迹、命)」、「倭^{やまと}に上り到りまして、……祓^{はら}禊^ひして、……神宮を拜ましめ(大雀、命)」たまひ、或はまた「百濟^{ひやくせい}國に、若し賢人あらば貢れと仰せたまひ(品陀和氣、命)」等々のことをもなし給はつたのである。これら皆すべて清明心の純粹なる發動によるものと解し奉ることができると思はれるのであるが、その清明心は時には知的に作出して機略縱横の戦法ともなり、時に情的に發露して美的なるものの追進ともなり、また時に意的に發動して、勇武なるものへの憧憬及びその實現ともなると思はれる。到處に物語られてゐる知謀發揮の戦畧物語、美なる人や例へば歌才など藝術的なものへの讚美の物語、勇氣や武斷や實行力の發揮やそれに對しての讚仰憧憬の物語などが、このことを明かに示してゐるといへるであらう。これらは結局はすべて「治しめし」のためのものであり、眞・善・美・清・吉等々の積極的價値の創造實現の働きに外ならぬと思はれる。そしてかゝる意味の「治しめし」が連綿として續いて、今日にまで及んでゐるのである。「おほみたから」たるもの、一切の自然的生活も文化的活動も、結局のところ、この「治しめし」を翼賛し奉るために外ならぬ。これが『古事記』全卷の内容が自ら語るところの價値的觀念と思はれる。

この「治しめし」を實現遊ばす絶對にして神聖なる最高の價値的存在自體即ち理想的存在者そのものは天^ツ神で在らせられ、天^ツ神の神裔にます「すめらみこと」で在らせられることはいふまでもないが、この存在者に對し奉

つた場合の「おほみたから」の心的態度の言表は、上巻に於ける場合と同様に、「恐し」なる言葉によつて現はされてゐると思はれる。

(イ)「ここに天皇畏みて白したまはく、恐し、我が大神。現御身まさむとは、覺らざりきと白して、大御刀また弓矢を始め、百官の人どもの服せる衣服を脱がしめて、拜み獻りき。」

(ロ)「かれ建内ノ宿彌、恐し我が大神、その神の御腹にます御子は、何の御子どもとまをせば、男子ぞと詔りたまひき。」

(ハ)「かれ言禱きて、恐し、命のまにまに御子の御名を易へまつらむとまをしき。」

これらは大神に對し奉つて、即ち(イ)は葛城之二言主、大神に對し奉つて大長谷、若建ノ命が御自ら「恐し」と申されたのであり、また(ロ)は天照大神に對し奉つて建内ノ宿彌が、(ハ)は伊弉沙和氣ノ大神之命に對し奉つて建内ノ宿彌がかく申されたのである。

(イ)「ここに建内ノ宿彌ノ大臣白しけらく、恐し、我が天皇。猶その大御琴あそばせとまをしき。」

(ロ)「ここに父が曰ひけらく、こは大神にましけり。恐し、我が子仕へまつれといひて、その家を嚴しく飾りて、候ひ待てば、明日入りましぬ。」

(ハ)「ここに大日下ノ王四たび拜みて白したまはく、若しかかる大命もあらむかと思へる故に、外にも出さずて置きつ。これ恐し。大命のまにまに獻らむとまをしたまひき。」

(イ)に於ては帶中日子ノ天皇に對し奉つて建内ノ宿彌が、(ロ)に於ては品陀和氣ノ命に對し奉つて丸邇之比布禮能意富美が、また(ハ)にあつては穴穗ノ御子に對し奉つて大日下ノ王が、何れも「恐し」と申して居られるのである。

これが「聖」即ち絶對にして神聖なる存在に對し奉る「おほみたから」の心的態度即ち清明心の發露であり、それが

そのまゝに今日にまで及んでゐることも固よりいふまでもない。

五 神話の成長發展

以上に於て我々は、『古事記』中卷・下卷の内容内に表現されてゐる價値學的なるもの、即ち價值的存在自體を價値主觀・價値客觀・價値作用の方面より、その内容自體をして語らしめるといふ、最初の企圖を大體に於て果し得たやうに考へる。そしてそれによつて得た我々の論結は、そこに盛られてゐる價値理念は結局に於て上卷の内容に盛られてゐるその理念の成長・發展に外ならないといふことである。換言すれば、『古事記』神話内に渾沌的カオスに含蓄せられてゐた理想的なるものが、自己内面の必然性に於て、宇宙的コスモスに展開したものの、それが中卷・下卷の内容であるといふことである。そしてそれが要するに、例へば「神倭伊波禮毘古命、畝火之白禰原宮にましまして、天下治しめしき。」といふことの中に、その根幹的なものが存してゐるといふことである。その内容を満たしてゐる複雑多彩なる事象も、要するにこの一貫して存する根幹を培養するところの、或はその根幹より派生せるところの、副貳的枝葉的のものであるに過ぎぬと思はれる。勿論その多岐多端に亘れる内容の中には、例へば數箇處に見られる反逆の物語などの如く、以上の價値的理念に背反すると解されるものもないことはない。併しながらこれと雖も、決してその根幹的理念を脅かすものではなく、むしろそれらの結末が常にこれを示す如く、その根幹的理念を益々強化し明化する役目をのみ、それらが果してゐると、遲疑なく明言し得るのである。例へば

建波邇安、王の亂（御眞木入日子印惠、命の御世）に於ても、そこには却つて大毘古、命、國夫玖、命の忠誠が明かにせられ、皇軍の威力と御稜威の伸長が物語られてゐる。沙本毘古、王の反（大帶日子淤斯呂和氣、命の御世）に於ては、沙本毘古の弱く悲しき至誠純情と毘古に對する天皇の限り無き御愛情とが此の上もなく人の心を強く打つものとして存してゐる。大山守、命の非望（品陀和氣、命の崩後）の物語に於ても、表面に明かにされてゐるものは、要するに宇遲能和紀郎、子の智謀に優れてゐること、敵命をも愛するその御仁愛とである。更に墨江、中、王の亂（伊邪本和氣、命の御世）にあつては、阿知、直の忠誠や、水齒別、命の純忠と、曾婆訶理に對するその功賞と罰責との驚歎に値する合理性などが物語の中心となつてゐるのである。最後に目弱、王の變（穴穗、御子の御世）の物語に於ては、そこに物語の中心となつてゐるものは、却つて大長谷、王の比類なき御武勇であり、都夫良意富美の條理ある忠誠の仕方である。以上の如き反亂は、不動不拔の寶祚に對し奉つては、大樹に對する微風の如きものに過ぎなかつたといへる。而も尙それらの反亂の主は、すべて臣下ではあられなかつたといふことも、大義名分の上から特に注意さるべき事柄であらう。神代以來確立され來つた寶祚は、かくて益々儼然たり、『古事記』中卷・下卷の内容は上卷の内容の必然的自已展開といひ得るのである。

併しながら、その展開は單なる展開ではなくして、成長であり、發展であるところに、中卷・下卷の特別なる重要性があるものと思はれる。成長發展といふことは、外貌に於て多岐となり、内實に於て豊富となることである。より一層多岐なる外貌と豊富なる内實とを自らの所有として有つに至ることは、所謂辯證法的綜合を刻々

に完了しゆくことに於て初めて結果されることと思はれる。辯證法的にこそまさしく歴史は—唯物史観や觀念史観は固より誤謬であるが—自己を形成しゆくものであらう。辯證法的綜合のためには措定に對する反措定が不可缺のものである。歴史も亦自己形成のために、反措定の要素を必要として有つであらう。そしてそれは決して措定の要素を脅かすものとしてではなく、それに成長發展の動力を與へる契機的要素として、必然的に有たねばならぬであらう。かくて『古事記』上卷の成長發展的自己開展たるの意味を有つ中卷・下卷の中に、この反措定の要素も、措定の要素の多岐豊富になるにつれて次第に多くなるといふことも、あり得る當然といはなければならぬ。上述の反亂の如きも、かくの如き反措定の意味を有つものとして、解釋し得られぬことはないであらう。

未だ綜合されざる、或は既に綜合されつゝも尙對立的に考へられたる措定と反措定との間には、矛盾の關係が存在してゐる。多岐豊富になるといふことはかくて矛盾をも多く有つに至るといふことである。『古事記』中卷・下卷が上卷よりもより多くの矛盾的要素をも有つといふことは、かくて當然ともいはねばならぬであらう。事實に於てその内容内には、上卷に於ては見出し得なかつた如き多くの矛盾的要素が存在してゐる。反亂がその一つと解され得ることは今述べた如くである。

生命と死との争ひは、神話の中にも殊に著るしきものとして多く叙べられてゐる。併しながらそこには未だ自殺といふ現象は現はれなかつたやうである。生命と死とへの自覺が強められなかつた故であらう。然るに中卷・下卷に於ては數箇處にこのことが記されてゐる。倭建命の後弟橘比賣、命の崇高にして而も悲壯なる御入水は人

皆によく知られた至情純忠の美しき物語であるが、こゝに擧げる例としては適切でない。それは生命と死との葛藤といふよりは、むしろ悲壯なる死の尅服であり、崇高なる生命の凱歌である。併しそれよりも少し以前に物語られてゐる園野比賣^{まゆのひめ}ノ命の、顔の醜^{みにく}さを恥ぢて、「樹の枝に取り懸^かりて、死なむとぞしたまひ」て果さず、遂に深き淵に墮りてぞ死^つせたまひ」たるは、かの神代の巻の石長比賣^{いはなひめ}の場合と比較して、我々はそこに並々ならぬ人間苦の葛藤を見ることが出来る。また木梨^{きのなし}之輕^{かろみ}ノ太子^{このみこと}とその同母妹輕^{かろみ}ノ大郎^{おほらう}ツ女^{むすめ}とが相互に歌ひ交しつゝ遂に「共に自ら死せたまひ」しことは、人生に敗れし人の悲劇的最後に示してゐるものといふべく、更に目弱^{まよわ}ノ王^おの亂に於て、王^{みこ}の御隠^{みこもり}りを王子^{みこ}なるが故にとて最後まで庇^{かば}ひし都夫良意富美^{とふらぎとみ}が、力を竭して戦ひたる末、「僕は痛手負ひぬ。矢も盡きぬ。今は得戦はじ。如何にせむ」とまをしたるに對しての王子の御答へ、「然らば更にせむ術^{すべ}なし。今は吾を殺せよとのりたま」へるに應じて「刀もてその王子を刺し殺せまつりて、乃ち己が頸を切りて失せにし」そのことの中に、我々はやはり生命と死との間の深刻なる葛藤をも見ることが出来るのである。また例へば理性と感情、即ち義理と人情の争尅も、上巻にないことはない。併しそれが中巻・下巻に於ては、甚だ深刻性を有つたものとして現はれて来る。その最もよき例は、既にも述べた、沙本毘古^{さほんひこ}ノ王^おの反に於ける沙本毘賣^{さほんひめ}ノ命^{いのち}の切々たる衷情である。何人かこれを涙なくして讀み得るものがあらう。またこれも前述の、水齒別^{みづはなべ}ノ命^{いのち}の會婆訶^{くわが}里^りに對する涙あり條理ある功賞・罰責の中にも、我々は義理と人情との葛藤を、そしてこゝではそれに對する明快なる處斷を見ること出来る。また愛情の物語にしても、單なる官能的愛に墮することはなく、それに相對する節操を、次

第に自覺的に有つやうになり來つたことは、例へば赤猪子あかぶこの物語などにも、これを見ることのできるところと思はれる。その他また例へば、一般に神を齋き祭ることの多くなつたことは、神人分離を意識的に考へることの多くなつたことの意味を有ち、また御一代毎に都を遷されたことは、清と汚との對立を益々強く意識されるに至つた結果、汚穢なる古都を逃れて、清明なる新都に遷られるといふ意味を有つたものとも解し得られるであらう。これら諸々の矛盾對立的要素が、その内容の如何なるものにもせよ、『古事記』中卷・下卷の外貌・内實を頗る多岐豊富なものとしてゐる事實は、これを見逃し得ないと考へる。

併しながら、以上の如き多様は、價値學的に見て決して、統一なき多様ではない。そこには、唯一最高の價値理念による至完至美の統一がある。この統一は、神代以來一貫して存するものであり、『古事記』全卷を通じて明かなるものである。かくて、「多様の統一」こそ、『古事記』全卷の内容の價値現象學的形態といへる。そして、その美しき統一を成立せしめてゐる中核的唯一最高の價値的理念、それが如何なるものであつたかは、本稿の眼目として、以上既に明白ならしめ得たと考へる。(一五・九・一四)